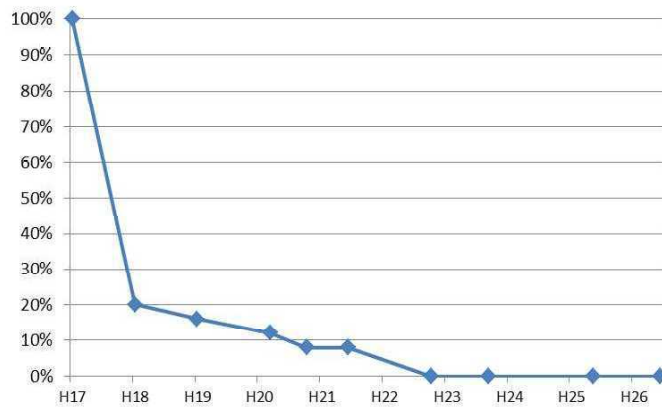


樹種名	ホルトノキ（別名：モガシ）	
科 目	ホルトノキ科	
学 名	<i>Elaeocarpus sylvestris</i> v. <i>ellipticus</i>	
分 布	本州(千葉県以西)、淡路島、四国、九州、沖縄に自生する。国外では、台湾、インドシナなどに分布する	
樹木特性	常緑高木であり、本州以西の西南日本で照葉樹林の高木層構成樹として重要とされ、各地の社寺林の中で巨木が見られ、まれに沿海地に自生する。 古い葉は落ちる前に紅葉し、常に一部の葉が紅葉しているのが見られる。	
用 途	街路樹や公園の緑化木として利用される。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	25 本／0.008ha (約 3,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 照葉樹林に生え、樹高は 10m 程になり、大きいものでは 30m になるものもある。 樹皮は、灰褐色で滑らかであり、葉は互生し、枝先に集まる。葉身は倒披針形～長楕円状披針形でやや革質であり、縁には鈍い鋸歯がある。 初夏に古い葉が紅葉する。木の全体的質感は、ヤマモモやユズリハなどと似ているが、この紅葉があることで区別できる。 緑の葉に混ざるこの紅色を、模様(紋)に見立て「紋ガシ」「模様ガシ」と呼んだのがつまり、モガシと言う別名が生まれた。 花期は 7 ～ 8 月頃に総状花序が腋生し、白い小さな花を多数付ける。初夏に花が咲き、横に伸びた花茎に穂状に付く、個々の花は釣り鐘状で白い。 果実は核果で、長卵状楕円形、熟すと藍黒色になる。 平賀源内は、この実から当時貴重なオリーブ油(ポルトガル油)が採れると思ったらしい。そう言えば、似ている。 ホルトノキの名前の由来については、ポルトガルの木という意味で本来はオリーブの木を指すのだが、誤って本種の名前になってしまったという有名なエピソードがある。これは、江戸時代に薬用に使われていたホルト油（オリーブ油のこと、ポルトガル油ともいう）の採れる木と誤解されたためといわれている。	
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽直後から原因不明の枯死が発生し、6 年後には全て枯死した。このことから、当試験地内には現存する樹木はない。	
被 害	植栽直後から原因不明の枯死が発生した。その他のコウモリガやカミキリムシ類やシカ被害については確認できない。	

ホルトノキ 現存率



【現存率】

植栽時の翌年から大部分が枯死した。6年を経過した時点で全ての樹木が枯死した。

